



Atsushi Mekarū

銘苺 淳の

HAPPY HANDBALL

vol.13

PROFILE

1985年4月3日生まれ、26才。沖縄県浦添市出身。港川中で野球から転向してハンドボールをスタート。那覇西高一筑波大を経てトヨタ車体に進み、時代を変えるセンターとしての期待を集めて躍動中。ひたむきな取り組み、明るく快活な性格で、ワールドクラスのコミュニケーション能力を誇る『ハンドボール界の松岡修造』。連日更新しているブログ「おにあくま」(<http://meka-atsu.jugem.jp/>)も好評だ。

おごらず、にくまず、あせらず、くさらず、まけるな!!

小さくても…セオリーはない

すっかり冬になりましたね。私はこの時期寒さと闘っていていつも僧帽筋が緊張しています(笑)。冬本番に向けてハンドボールだけではなく、さまざまな競技が盛り上がるのでスポーツ好きにとってはうれしい季節でもあります。

女子バレー竹下選手に学ぶ

私はバレーボールも好きでよくテレビや雑誌で見ているのですが、以前、長年代表セッターを務める竹下選手が、このようなニュアンスのことを言っていました。「小さいからこそ、大きい人が考えないことまで考えなければならぬ。その考えた分だけバレーボールを深く追求できる。だから小さいということはハンデではなく、プラスの要素だ」と。そのとおりかもしれませんね☆

形態的に小さいということは大きい選手と勝負するためにいろいろと工夫をしたり、考えたりしなければなりません。その分、ハンドボールを深く深く追求することができるのだから、捉え方次第ではストロングポイントになります。

センスがある

スポーツの現場ではなんでも器用にこなす選手を「センスがある」なんて言い方をよくします。逆に不器用なことを「センスがない」なんて言います。このセンスですが、感性や感じる力なのでもちろん生まれ持ったものもあります。しかし、生まれながら「センスがない」ということはありません。

竹下選手を実業団に入れたのは当時NEC監督、現トヨタ車体女子バレー監

督の葛和さんです。葛和さんの話によると、本当にほしかった大きいセッターが他のチームにいってしまい、小さいけれど仕方なく竹下選手をとったそうです。

しかし、竹下選手は毎日陽が昇る前から体育館に行き、1人でずっと練習していたそうです。他の選手が考えないことを考え、ライバルが寝てる間に努力をし、感性を磨いてきたからこそ日本を代表し、世界に通じるセッターになったのだと思います。

果報は寝て待て、と言われますが、実際はただ寝ているだけではなく、練(ね)って待つ。すなわち、竹下選手の活躍は小さい分、練り上げて、センスを磨き上げて、やることやった結果ということになります。こう考えるとセンスがないと思われているのは、そのセンスを練り上げて磨いてないだけのことなのかもしれません。

ダイヤモンドの原石

我々ハンドボーラーみんな、ダイヤモンドの原石だとします。原石ですから、もともとの大きさは人それぞれです。しかし、どんなに大きな原石でも磨かなければダイヤモンドとしての価値は上がりません。逆に小さくてもしっかり磨けば素敵な輝きを放つはずですよ☆

だけどダイヤモンドは天然物質の中で世界一硬いので簡単に磨くことができません。ダイヤモンドはダイヤモンドで磨くんですね。そう考えるとセンスを磨くのは自分自身、もしくは同じテンションを持った、同じ輝きを求める仲間や指導者となります。ハンドボール全体が、

お互いがお互いを磨き、高めあう集団であってほしいですね♪

セオリーはない!

私もハンドボールを始めた当初、身体は大きいけれど、どうにもこうにもハンドボールが下手っぴでロボットのような動きをしていました。当時「ポット君」と呼ばれたくらいです(笑)。悩んでいた時に恩師の東江さんが「セオリーはない。お前がセオリーになればいいだろ」と教えていただきました。

ハンドボールのある局面において、その状況を打開する方法は無数にあります。シュートにおいても1人ひとり方法論は違います。それをセオリーにはめてしまえば、セオリーと言われている以上のものは生まれません。もちろん、基本であるセオリーを理解し、体現できることが前提ですが…。こうあるべきだ、というセオリーはあるっちゃあります。でもそれだけがすべてではないのが、状況に応じて展開されるハンドボールのおもしろさの1つのはずです。

クロアチアのバリッチ選手は彼しか持たない間合い、タイミングを持っています。1対1もドリブルから始めたりします。もちろん、基礎、基本のプレーをしっかりと行ない、その上に練り上げたものです。それがセオリーに当てはめて画一的な指導をする指導者だったのなら今のバリッチ選手の独創的なプレーはなかったのかもしれない。

めざせファンタジスタ

みなさんはハンドボールを「ソウゾウ」していますか? よく「イメージ」という言葉を使いますが、これは「想像」にあたり、過去再生的なものです。自分の力や相手の力を思い浮かべながら「こうしよう、ああしよう」と想像しますが、自分の知っている範囲でしか考えることができません。

もう1つ、「創造」があります。これは未来生産的なもので今までになかった新しいものを生み出すということになり、運動学ではファンタジーと言います。特別な技術を持ち、だれもが予想しないプレーで観客を魅了する選手をファンタジスタといいますが、その人自身がセオリーとなってまた新しい技術が生まれ、ハンドボールが発展していきます。

あっと驚くようなハンドボールなんだけど、しっかりとした基礎基本に裏打ちされていて、やっけても見ていてもおもしろい。そんなハンドボールを練り上げて、みんなで作っていきたくらいと思いませんか?

センスを磨いて、自分自身を磨いて日々精進していきたいと思えます。